

センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



震災から約二年半が経過した陸前高田市正徳寺近くの沿岸部の現在の様子(2013年9月14日撮影、2～4面に関連抄録掲載)。震災以前は工場や住宅が十数件立ち並んでいた。(写真の無断転用はご遠慮下さい。)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 現代社会と真宗教化
でらぼう NAGOYA 公開講演会 2・3・4
- ・ 研究生活動報告 5
- ・ 大谷派の近現代史
「あいち・平和のための戦争展」に出席 6
- ・ 「差別と私 ―差別語に学ぶ―」
職員研修開催 7
- ・ INFORMATION 8

◆寺報イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

ただ信心を要とす

ある御同行から、「今、自分のものさしに合わないものを断ち切り捨てる『断捨離』なることが流行しているらしいですね。私もそのうち子どもに『ほかれる』かもしれないね。」初めて聞く言葉と、その内容に驚きを感じ、家に帰って早速インターネットで調べてみると基本的にはヨガの行法、「断行」「捨行」「離行」という考え方を応用して、人生や日常生活に不要なモノを断つ、また捨てることで、モノへの執着から解放され、身軽で快適な生活を手に入れるという考え方、生き方、処世術なのだそう。

かくゆう教化センターも時代の変化に伴い保存媒体を移行する中で、遅まきながら未整理の資料や機材の整頓・清掃に取り組みはじめています。その結果、お恥ずかしいことに物置と化していた教務所二階の旧講師室が、自然の間として開かれることとなった。和室の落ち着いた雰囲気、快適な空間を輪読会や座談会などに御活用いただければ幸いです。

しかしながら捨てることによって、身軽で快適になる一方、捨ててしまったがために失った「大切なもの」もあるのではないかと。そんな問いかけを東日本大震災で被災した陸前高田市正徳寺坊守の千葉寿子氏の講演「お庫裡さん奮闘記」(本誌二・四、抄録)を聞かせていただき考えさせられた。

思い起こせば私が幼少の頃、地域社会との関わりも密接で、隣の家の笑い声から夫婦喧嘩まで手に取るように感じられる生活臭が漂っていた。人間同

士のしがらみも色濃く、台所の影で目頭を押さえ涙する母親の姿に、自分自身、身軽で快適なマイホームに憧れたことが今更ながら憶われる。

また、過去の歴史を紐解くとき、近隣アジア諸国との繋がりは仏教伝播を始めたとして礼拝讃嘆すべき関わりを持つ。その一方で近現代における哀しく痛むべき事実には代表されるような歴史への向き合い方に、「断捨離」を感じるのには私だけであろうか。まさに人知の闇である(本誌六・七面)。

しかし、今こうやって傍観している私に対して宗祖は、

弥陀の本願には老少善悪の人をえらばれず、ただ信心を要とすとしるべし。

と述べられる。

『歎異抄』第一章

弥陀の根本の願いは、一切衆生を救いたいという大慈大悲の御心である。老少は人生経験の多少であり、善悪は社会規範であらう。世間にあつては、老少善悪の差異を損得のものさしに当てはめ、得ならば選り取り、損は簡ひ捨てて仕分けることだけに生きている。しかし、いのち本来の願いは、老少善悪、さらには損得を超え、簡ひ仕分けることなく到底できない歴史の繋がりのなかに、共に生きたいと憶う「信心」を回復することしかないと知ることであったのである。分けて知ることだけで生きてきた私に、「南無阿弥陀仏」の喚び声が、ただ「大切なこと」を要てくる。

(教化センター主幹 荒山 淳)

現代社会と真宗教化
2013年6月24日(金)

でらボラNAGUYA 公開講演会

お庫裡さん(避難所生活)奮闘記

今、生かされている私たちができること
共に在り、人々の声に耳を澄ます

仙台教区 正徳寺坊主

千葉寿子氏



さる六月二十四日、名古屋教区の寺院関係者を中心に東日本大震災の復興支援に取り組んでいる「でらボラNAGUYA」(代表北条義信氏)が、名古屋教務所議事堂を会場に、講演会を開催した。

未曾有の大震災から、はや二年半の月日が経とうとしている今、震災を機縁に浮かびあがったはずの「大切なもの」が、個々の生活の底に再び埋没しつつあるように感じられる。このたびの震災が我々に何を問いかけ、どのような課題を浮かびあがせたのかを今一度確かめたく、「でらボラNAGUYA」及び千葉寿子氏の協力のもと、講演の抄録を掲載させていただいた。

震災が起きて

私の自坊、正徳寺は古来より津波の被害が多い岩手県陸前高田市にあります。三月十一日の地震が起こった時、私はたまたまお寺におりました。とにかくものすごい揺れだったので「絶対、津波が来る!」と直感しました。咄嗟に一番下の息子のことが頭に浮かび、地震が止まったらすぐに車に乗って迎えに行きました。下校途中の息子たちの所にたどり着くと、海沿いの線路近くの空き地に六人ぐらいて集まってめそめそと泣いていました。皆を送り届け、今度は息子を乗せたまま上の二人の娘を迎えに学校へ向かいました。

学校に着くと、「大津波が来るぞ!」という防災無線がブツツと切れました。ほどなく校庭に海の波がさわさわと来るのが見えて「これは危ない!」と一気に逃げ出しました。波が来た方に家がある地区の子たちは「ああもう自分の家はダ



震災後まもない正徳寺近くの海の様子。(2011年3月28日撮影)

メだ」と泣いていましたが、「とにかく逃げなきゃ!」と足が止まるのを叱り飛ばしながら近くの林の中に逃げ込みました。ゴォーッという音と、沢山の車のクラクションの音がするのですが、なにせ林の中なので状況が分からないのです。泣いている子どもたちと共に、ただその

音を聞いていることしかできませんでした。

林から公民館までの抜け道を探し、視界が開けた時、眼下はもう本当に一面「海」でした。そこは黒い水で覆われ、車もぶかぶか浮び、どこから来たのか大きなタンクもごろごろ転がり、渦を巻いている状態でした。正直それを見た時「うちの主人はダメだったんじゃないか」と思いましたが、ひょっこり自転車で見れば、「みんなお寺に避難してきて開けてもらうのを待っているから、今すぐ戻ってきてくれ」ということで、急いでお寺に戻りました。

その日は寒い日でした。雪が降ってきて空も暗くて「ああどうなるんだろう」と思いながらお寺まで歩きました。子どもたちも一言も話ませんでした。

お寺を避難所に

お寺に着くとすぐ「どうでしょう。開

けてもらえませんか?」と多くの方が待ちかねていました。急ぎ庫裡を確認すると建物の被害はありませんでした。「すぐ開けられます」と言いましたら、開けた瞬間にうわーっと大勢の人が入ってきて、人数も数えられない状況になりました。

まず「とにかく炊き出しをします。おにぎりを一〇〇個以上作って下さい!」とお願いをし、五升炊きのガス釜で炊けるだけ炊いて、みんなに順番に配って人数を数えたところ大体一五〇人の避難者が集まっていました。

もう無我夢中でした。温かいおにぎりを初日から食べられたことが本当に救いだったと後に多くの方に言われました。そしてお寺にあるだけの布団を全てお年寄り子どもに出し、若い方たちは座布団や差し入れの毛布で間に合わせてその晩を過ごしました。とにかく情報が全然入らず、ラジオでは「壊滅」というんですが、その「壊滅」というイメージが湧かない。そんな不安の中、その日の夜を過ごしました。

お寺を預かる者として

次の日からの二、三日は「さあ何を食べさせようか」というのが私の目の前の仕事でした。とにかく避難者が大勢だったので、まずおにぎりと漬け物と、余裕が出てきたらお味噌汁を作ったりしました。物資が入ってくるまでの三日間、そうやってなんとかしのぎました。

最初、男性の方々は自分が積み上げてきたものが全部一気に流されてしまった状況を見て、呆然としてしまっていました。女性はこのいう苦境でも「まず食べ

させなきゃ！」と積極的に動いていました。そんな中、私は「みんなでやりましょう」とお願いをし、「おにぎりを作りますので集まってください」「水汲みをしてください」と声をかけました。とにかく皆さん呆然としているので、私に指示をされて動く。最初の一週間はそんな感じでした。

そうした様子を見てみると、次第に取りまとめができてそうなが分かってきます。その方に、「この部分のまとめ役をしていただけますか？」とお願いをし、徐々に仕事を振り分けていきました。そうすると最初は言われてやっていただけのことが「これはこうやってやりましょうか」とみんなでコミュニケーションを取り合いながらやってくれるようになります。最初は私のリーダーシップで避難所は動いていましたが、徐々に私の役割は見守り役、最終決定の後押しに変わっていききました。

共同生活の難しさ

物資のなかった当初、「助かっただけでよかった」と言っていたのが、「食べられればいい」になり、「お風呂にも入りたいなあ」「きれいな服も着たいなあ」と変わっていききました。歯ブラシを物資として請求しても十本くらいしか届きませんでした。気が利く人は「あそこに歯ブラシあるよね」と欲しがるので、うちでは全員に配れるようになるまでは徹底して渡しませんでした。今まで仲良く付き合っていたお隣さんが歯ブラシ一本、パンツ一枚で背を向ける、喧嘩するという姿が多く避難所で見られたそうです。長年培ってきたものが壊れてしま

わないように、その点は十分配慮し徹底しました。

それから中国の留学生やフィリピンから嫁いできた方も避難に来られました。日本の文化的な感覚を理解してもらうのにとっても気を配りました。例えば食事を配る際、最初に「お年寄りとお子さんから来てください」と言っても、我先にと二十代の若者がやってきます。「弱い者の順」ということが分からない。限られた物資で食事を作っている、みんなの前で自分だけカップラーメンを食べようとする。「みんなと同じ」ということが分からない。共同生活ですので、そういったことでもいろいろ配慮しなければなりませんでした。

また「記録を残す」ということもとても大事でした。最初は菓子パンや食パンなどバラエティに富んでいた物資も、日々クロワッサンしか入ってこなくなる。どうしても食事に偏りが出てきますので、いつ何を食べたのか分かるように、メニューを記録にとりました。保健師さんが巡回に来られた時、「大変な状況の中、バランスのいい食事をとっておられますね。栄養状態が分かるので助かります。ぜひ続けてください」と言われまして、それで、解散式の前までの五ヶ月間、記録をとり続けました。

役割を持つことの大切さ

トイレを一部の方々が率先して掃除をしてくれました。するとそれに倣って「私もお手伝いしよう」と手伝ってくれるのです。そういった形で自然に役割が広がり、分担が決まっていきました。

「仕事がある」ということが、避難生



正徳寺の庫裡に置かれた物資の数々

活を送る上でとても良かったと思います。やはり役割を持つと自分も避難所の中の家族の一員としての自覚が出ます。そうなることで日常を取り戻すための訓練、リハビリということにすごく役立ったのではないかなと思います。

この「みんなが役割を持つて働く」ということは、恐らく公の避難所ではできなかったことだと思います。そこでは配られてきたご飯を取りにいった、食べて、何をするわけでもなく一日が終わる。掃除も自分たちでしなくてもいい。ただただ「居るだけ」。どんよりとしていて、なにか調子が悪いと訴えている。うちではお年寄りも元気でいた。昼間なんか縁側のお日さまのあたるところにズラッと並んで、走り回る子どもたちを「はあ、いいねえ」とニコニコ見ているわけです。そこだけ見ているととても避難所に見えない和やかな空気が流れていました。

人との関わりが開くもの

震災初日のとても寒い夜、なぜか窓が開いていました。おかしいなと思って閉めると「なんでタバコ臭いのをそのままにしとくんだよ」と怒鳴られました。彼は元々近所に住むAさんという男性で普段からフードを目深にかぶりマスクをして歩く一見不審者のような人でした。Aさんはトラブルを度々起こしましたが、実は水汲みや草取りをよくやってくれる人でした。好きなことは自分のペースで一生懸命やるけれど、コミュニケーションをとるのが苦手な方でした。うちの息子がちょっといたずらをした時、「絶対俺んここに寄ってくんない」と怒鳴られました。私と息子で謝りに行きましたが「もういい！」と一蹴されました。ですが次の日、住職に「昨日はちょっと言い過ぎた。申し訳なかった」と謝っていたそうです。

同じ釜の飯を食べて一緒に寝食を共にしていると少しずつ心が開いていきます。Aさんはプラモデルを作るのがとても上手でした。それを庫裡の玄関に順番に並べ始めました。それにうちの息子がすごく反応して「いやあすごい！」と喜んでいました。家族で出かけた時に「Aさんと一緒に作るからプラモデルがほしい！」と言ったので買って帰ると、車から降りた瞬間に避難所の入り口に向かって「Aさんーん！買ってきたよー！」Aさんも「おお！」と言ってそこから二人で一緒にいそいそとプラモデルを作っていました。

「いいなあ、人と関わることでこんなに変わるんだな」と思っていました。



約五ヶ月間続いた避難所の解散式の様子

たまたま私たちのいない日の夜にいざこざがあり、出て行ってしまいました。「最後までここにいたらいいのに」と言ったのですが、譲りませんでした。でも昼間にひよこつと顔を出してみんなとお茶を飲む彼がいました。最初は不審者だと思っていた人もたった五ヶ月でそこまで変わる。傷つけられるのも人からですが、癒されるのも人との関わりなんだということ学びました。

私の子どもたちにも最後まで避難所で一緒に生活させましたので、ずいぶん無理をさせました。しかしこういったことはさせようと思ってできるものではありませんので、知ってほしい、心だけじゃなくて体で感じてほしいということ、最後まで避難所での生活を押し通しました。一年後に書いた作文には「とても大変で嫌だったけど、もし同じ状況になったら私も両親と同じようにお寺を開きたい」と書いてありました。あの避難所生活という経験は、とても大変だったけれど、忘れられない大切なものだったんだ

と私自身振り返っています。

避難所のその後、被災地のお寺として

その後、七月末に避難所の解散式を行いました。しかしお寺が日常に戻っても、お講当番が被災地区にあたる月は定例布教ができませんでした。ですの十一月の報恩講はどうなるかと心配だったので、被災していない方々が「こんな時こそ頑張んなきゃ！」と言って来てくださいました。それまではそんなにお寺に関わりがなかった方々が、きちっとお手伝いに来てくださり、とてもうれしかったです。それだけでも「お寺を開けた甲斐があったな」とその年の報恩講は本当に格別の思いがしました。

このようにして避難者の間に一体感が生まれたのですが、だんだん時が経つにつれて、状況が変わっていききました。自力で再建した人もいれば、まだ仮設住宅にいて見通しが立たない人もいます。被災がない人もいれば、まだ行方不明の家族がいる方もいます。そこでどんな線が引かれていって、言葉一つですれ違ってしまう。同じ被災地にありながら「あなたは被災してないからね」「家族が亡くなってるからね」と言われてしまうと本当に苦しい。そういう行政で掬いとれない人たちの思いを吐き出せる場がお寺に求められているように感じます。そのためにも今までと同じように勤めていく。変わらないということが皆さんの心の依り処になる。ここに来れば震災前と同じ日常がある、そういうことを思い出せるような場になるように、これからもやっていきたいと思っています。(丁)

(文責編集部)

取材を終えて

震災発生当初から今まで、被災地では何が起きたのか。愛する人との突然の死別、無惨にも瓦礫の山と化した町並み、我慢を強いられる避難所や仮設住宅での生活など、これまでに幾度も痛ましい現地の状況が報道されてきた。

私は震災後三、五週間の時期に被災地へ入った。そこで目のあたりにしたのは、あまりに大きな悲しみを受け止めることもできず、築き上げてきた全てを失い、そして次には全ての物を与えられ、ひたすら一方的に「ありがとうございます」と頭を下げ続け、生きる意味、自己の価値を見失った人々であった。私はかける言葉を見つけれなかった。しかし、そのような家も仕事も地域も家族も失ってしまった人たちの心の奥底から次第に「生まれてきたからには胸を張って生きていきたいんだ」「必要とされたいんだ」という自己の尊厳の回復を願う心が湧き上がってくる様を見た。そのことに立ちあえたことは、私にとって非常に心を揺さぶられる体験であった。

千葉さんの講演でも語られたが、避難所の空き地で駆け回る子どもたちを眺めたり、いろんな世代が入り交じった避難所での共同生活中「なんだか昔みたいで懐かしいな」とつぶやくお年寄りの声があったとたびたび耳にした。次第に避難所では個人のスペースを区切られ、仮設住宅ではやっと家族だけの生活を取り戻せたことと喜ぶ反面、「また寂しい生活にもどっちまったなあ」とつぶやく声もあったという。それはただの懐古主義ではなく、

幾多の苦しみ悲しみを乗り越えてきた人々が、どうか次代につなぎ続けてほしいと願う「大切なもの」のように思えてならない。壮絶な震災の爪痕に目を奪われてなかなか気づき得なかった、残された人々の心の痛みの根は「居場所の喪失」だったのではないだろうか。互いに役割を持ち、認め合い、支え合い、関わりの中で個々のいのちを全うすることを許された場、「生まれてきてよかった」と身が悦ぶ場を喪失してしまったのである。

今回の講演の中で千葉さんは、避難者に「役割を与える」ことを通して、「あなたはこここの家族なんだよ。あなたは必要なんだよ」と伝えておられたように思う。その結果として避難者のみならず、千葉さん自身も一緒に生活を営み、他と関わっていく中こそ、自己のいのちの輝く場があることを見出していったようにお見受けした。なぜなら想像を絶する厳しい生活だったであろう避難所生活を、とても生き生きと語っておられたからである。そこに自身の担っている役割を関わりの中で歩んでいくとしておられる姿を拝見し、私は非常に感銘をうけた。そして、正徳寺において震災を機に広がりをもせた朋に生きる世界は、避難所の解散で終わることなく、「地域にとって、そこに集う人々にとって、お寺とは？」という新たな課題を背負って歩み続ける千葉さんに、多大な勇気をいただいた。

改めて思う。一人ひとりの「居場所」となる朋に生きる世界を断ち切ってしまったのは、果たして津波の牙だけであらうか。寺院がマイホーム化していると言われる昨今、多くの気づきと問いかけをいただいた講演であった。

(業務嘱託 黒田 真慈)

研 究 生 活 動 報 告

私にとつてご本尊とは？ —真宗門徒講座の 担当を終えて—

本年度の真宗門徒講座は「真宗門徒のくらしとつとめ」というテーマのもと、教化センタースタッフと受講されている皆様が双方向で作り上げていく講座です。私は第二回の講座を担当させていただき、「私にとつてご本尊とは」という課題をいただきました。講座を担当するにあたり、普段なにげなく向き合っているご本尊をもう一度じっくり観察しなおす機会をいただきました。また講座当日は、受講者の皆様にもマイクを向けさせていただき、それぞれのご本尊観についてご意見をいただきました。講座の中でそれぞれの思いを言葉や文字にすることにより、自分自身も今まで気づけなかったご本尊へ向き合う姿勢が見えてきたように思います。

真宗の本尊は方便法身尊形と言われます。本心に「尊いこと」を「尊いもの」としてあきらかにされています。「尊いこと」が阿弥陀様というお姿で表現されています。このように言葉にすることは簡単で、知識ではわかっているつもりでいましたが、実感として今ここに阿弥陀様がいらっしゃるんだという感覚を持つことができない自分がいました。今回課題をいただいて、阿弥陀様のお顔、手の



参加者を前に話をする様子

形、背景、周りのお荘厳など、あらためてよく観察しました。今回の講座を終えた後も、残念ながら未だ実感を持てていません。しかし、ただひとつだけはっきりわかったことがあります。それは、自分自身の姿です。

阿弥陀様は泥の上にしか咲かない蓮の上に立つておられます。そして闇の中から四十八本の後光が私に向かって差しています。ご本尊の中で闇として描かれている部分と、蓮の下にあるであろう淤泥（おでい）は、普段の自分自身の姿そのものであると思いました。阿弥陀様が泥の上の蓮台に立ち、その闇を照らしてくださっているのだとすれば、どこか遠くの世界のことではなく、私の中にこそ立ってくださいているのではないかと思いました。

今回この講座を担当させていただいて、ご本尊に向かって手を合せるということであらためて考えた時、ご先祖やいのちへの感謝だけでなく、そのことを通

じて私自身のありのままの姿と向き合うことのできる時間であると感じました。

(第九期研究生 堂宮 淳賢)
たみや あつり

お寺は楽しいところ！ —子ども奉仕団に 参加して発見—

八月五日から六日に開催された「真宗本廟子ども奉仕団」に引率スタッフとして参加しました。参加した子どもの中には、初めて自分一人で泊るという子や、キャンプなどでお泊りには慣れている子どもなど様々でしたが、今回は十四人の子ども全員が、東本願寺に泊るのは初めての経験でした。

私の所属する十三組では、三年前から組の事業として「子ども奉仕団」への参加を募って実施していますが、私は初めての参加だったので、「子どもたちが馴染んでくれるか」「体調を崩さないか」など、とても心配していました。

同朋会館に到着後、引率した子どもたちは、全国から参加した他の子どもたちと交流するために、バラバラの班になり、子どもたちは不安そうな顔でそれぞれの班へ分かれて行きました。「馴染んでくれるかな？」という心配をよそに、さっそく新しい友だちと仲良くなり、スタッフのお兄さんやお姉さんにも慣れ、楽しい時間を過ごしている姿に安堵しました。

私は、今まで本山に参る機会が少なく、本山と言えば、「厳粛な法要等が勤められる堅い場所」というイメージしかもっ

ていませんでした。団体参拝で一緒にお参りしたお年寄りからの「お参り出来てよかった」という声は時折耳にしていますが、今回引率した子どもたちに、「楽しい！」の声と笑顔がこぼれる場所だということを教えてもらいました。

帰路、「また来年も来たい！」という子どもたちの笑顔から、ほとけさまのもとで共に過ごした二日間は、夏休みのとてもよい思い出となったのだと嬉しく思いました。

お念仏、お寺が相続されてきた歴史のなかには、お寺に集って「楽しい！」という思いもあるのだと教えていただきました。

(第九期研究生 藤原 猶誠)
ふじわら ゆうせい



みんなで一緒に雑布かけ

大谷派の近現代史

「あいち・平和のための戦争展」に出展

去る八月十一日から十四日にかけて、名古屋市公会堂を会場に開催された「第二十三回あいち・平和のための戦争展」に今年も出展。

この展示会には、熱田や半田の空襲など地域目線で戦争を語り継いだり、原子力発電などの現代社会の問題を指摘する四十以上の団体が参加し、四日間の開催期間中におよそ一八〇〇人の方々が来場した。

教化センターでは、平和展の学びを社会に伝えるべく、毎年この展示会に出展しています。今回は、「仏教と戦争協力―占領地の「開教」―」をテーマに掲げました。とりわけ、北京別院の開設に尽力した藤井静宣（豊橋市淨圓寺、一八九六年―一九七一年）という一人の人物を中心に引き上げ、占領地の「開教」と戦争協力を考えました。

大谷派による近代以降の「海外開教」は、一八七〇年代に小栗栖香頂が上海で活動したのが始まりです。これは、他宗派に先駆けて行われたものでした。以後、大谷派は天津や大連、「朝鮮」などで「開教」を行いました。そして十五年戦争期に入ると、日本軍によって獲得した「占領地」や「植民地」の拡大に同調する「開教」になっていきました。

十五年戦争は、満州事変（一九三一年九月十八日）から敗戦までの約十五年間の間を「戦時中」と捉える歴史観で、日米開戦以後のみが「戦時中」ではなく、満州事変から「満洲国」の建国、日中戦争、日米開戦へと戦争が連続していると考えます。真珠湾攻撃以後の「大東亜戦争」のみを戦争と捉えるならば、アジアに対する「加害」が隠されてしまう恐れ

があります。

日中戦争が始まるきっかけになった盧溝橋事件（一九三七年七月七日）から約四ヶ月後の十一月二日、大谷派は北京に別院を開設しました。小栗栖が上海で「開教」した時期を含め、大谷派は、数度にわたって北京へ教線を拡大することを試みましたが、いずれの場合もスムーズに行きませんでした。その事実を鑑みると、異例のスピードで別院が設置されたこととなります。この開設に尽力した人物が藤井静宣です。彼は盧溝橋事件の五日後の一九三七（昭和十二）年七月十三日に、大谷派から日中戦争の慰問を命じられ、翌十四日には、満州開教監督の藤岡了淳とともに、日本軍と居留民を慰問するよう「特派」の任をうけました。翌八月七日には、従軍布教を命じられました。占領地の最前線で大谷派として行動するよう命じられたのです。

そもそも藤井は、戦争や大谷派の「海外開教」を理由に中国へと渡ったわけではありませんでした。一九二七（昭和二年）に大陸に足を踏み入れましたが、外務省の特別給費留学生という身分で中国語研修と中国仏教を研究するため、上海の東亜同文書院と北京大学で学びました。

その成果を『支那最近之宗教迫害事情』（一九三二年）として上梓しました。つまり、私的な理由で中国に渡っていたのです。そして、中国語を身につけ、中国仏教にも詳しい藤井が大谷派から開教使に任命されたのは、一九三七（昭和十二）年十一月二十三日。同じ日、中国北京別院輪番に任命され、藤井は大谷派を代表する立場として中国の地で活動することになったのです。

この頃の「海外開教」は国策に基づく活動しか許されず、宗教の布教よりも宣撫活動に重点が置かれ、学校を設立したりといった、反日感情を持つ中国人に対して懐柔するような活動をしました。その一つとして大谷派は一九三八（昭和十三年）年九月十七日に、北京覚生女子中学校を開校しました。この学校は、一九三五（昭和十）年十二月十八日に成立した地方政権「冀察政務委員会」の重要人物、陳覚生の遺産をもとに創設された女学校です。中国式の初級三年・高級三年の六年一貫制中学校で、小学校（河北省立通県師範学校付属小学校を接收）を付属していました。校長の陳鮑蕙（陳



「あいち・平和のための戦争展」の教化センターのコーナー

覚生夫人）をはじめ、中国人教師が携わりましたが、大谷智子裏方が名誉校長に就任するなど実質的な経営は大谷派が握り、生徒には日本語教育が徹底されました。修学旅行では日本を訪れ「日中交流」を行いました。そうした活動が、宣撫活動です。「日中交流」は、「平和のため」だと言っても、宣撫工作の一つであり、宗門による戦争協力に他ならないのです。

このような活動に携わった藤井が自ら、それを望んでいたのかどうかはわかりません。しかし、私たちが確認すべきことは、戦争をきっかけにして、彼がそうした立場に置かれていった事実です。戦争は一人の人間の人生を大きく変化させます。寺院や僧侶も無関係ではありません。思想や哲学、宗教も無関係ではありません。戦争協力は「消し去りたい過去」です。そうした事実を含む歴史を調べ、公表していくことへの抵抗感を私自身も持っています。追求することにはどんな意味があるのか分からなくなることもあります。しかし、過去に目を瞑ることは未来にも目を瞑ることを意味します。

戦時中の寺院や僧侶は、一般市民と同じように空襲を受けるなどの被害を蒙りました。しかし、もう少し視野を広げてみると、戦争の被害者としての立場だけではなく、国家と一体になって戦争に関係した事実が見えてきます。そのような歴史を知り、「明日は我が身」であることを確認し続けることが、平和展の方向性です。

なお、今回の展示にあたって、藤井静宣ご子息で淨圓寺前住職の藤井宣丸氏に資料「覚生女学院写真」のご提供を頂きました。

「差別と私——差別語に学ぶ——」

職員研修開催

二〇一三年八月二日、教化センター関係者を対象にした研修会「差別と私——差別語に学ぶ——」を開催した。この研修会は、教化センターが行う教化事業の学習会で差別言辭が公然と用いられたことに對する危機感から開催したものである。差別問題について学ぶという意味だけでなく、「親鸞は弟子一人ももたずそうろう」と、徹底して平等の立場から念仏道を頭ににされた親鸞聖人の教えをいただくことに他ならない。問題の重要性を鑑み、研修会に参加した職員や研究員、研究生だけでなく、教区内外の皆さま方に報告申し上げるとともに、今後の方向性を示しておきたい。

問題の経緯

教化センターでは、教化事業の一つとして「平和展」を開催している。「平和展」は、過去の事実を振り返ること、現代に生きる私たちの問題と向き合う、未来の平和への取り組みである。四半世紀に及ぶ「平和展」では、「開教」の名のもとに行われた大谷派の教化が、過去の植民地支配が差別性を持って行われたことも浮き彫りにしてきた。

しかしながら、昨年度に行われた「第二十四回 平和展」の開催を進める学習会の席上、差別言辭が用いられた資料が当時の研究員によって提出された。この差別言辭に対して、平和展スタッフから無批判に用いられることの問題性が指摘された。しかし、この差別言辭は、当時の資料をそのまま転用したものであり、かつ、悪意をもって用いていなかったというところもあり、直ちに本人が問題性を認識するにいたらなかった。

唯一の専任スタッフである研究員による差別言辭に対して平和展スタッフらは、問

題性認識と検証、そして再発の防止を求めた。差別とは、本人に悪意を持つか否かに関わらず、また、対外的な文書か否かが問題となるものではないからである。そして、時を隔てて三度の差別言辭に関する集まりを持ち、問題の所存を確認した。

問題の所存

そもそも、この時に問題となったのは「鮮人」という差別言辭である。この言辭は主に、一九一〇年の「韓国併合」によって植民地化を確実にして以後に用いられた。それ以前には「韓人」という呼称があった。歴史家の内海愛子氏の説明によると、「大日本帝国の支配下であり、民族国家として独立できない気の毒な日本人々」という語感があり、日本人の植民地支配者としての優越感、支配者意識が凝縮されている^{※1}という。また、朝鮮の「朝」は朝廷と重なるために削除され、「鮮」の音が「賤」に通じているがゆえに「鮮人」と呼んだという説もある^{※2}。いずれにしても、問題は蔑称として用いられた言辭を現代社会においても無批判に使用することにある。なぜなら、無批判に用いることは、差別が温存され再生産されることを意味するからである。こうした差別に関する言辭は、「一等国」と称していたような過去の歴史を紐解くと、枚挙にいとまがない。「平和展」では、そうした時代の資料を用いることが多いが、その当時、日常的に使っていたからといって、差別的な意味合いを包含した言辭を肯定し、無批判に使用することがあってはならないのである。

その点について早い段階から、平和展学習会で確認作業があり、『新版朝鮮にかかわる差別表現論』(※2 紹介書籍)などの書籍紹介を通じて、植民地時代に韓国・朝鮮を侮蔑してきた差別言辭を学ぶべきであ



るという提言も平和展スタッフからあった。しかし、元研究員は書籍に目を通すことすらせず、差別性を含んだ表現を判断するための知識を得ることをしなかった。当センターの教化事業の最先端に立つべき研究員が、差別問題から目をそむけたのである。

教化センターとしての対応

元研究員による差別言辭は、単に差別言辭を用いたという事実認識の問題ではない。教化センターは差別を許さないと、親鸞聖人の教えに生きる真宗門徒の強い姿勢に反する根源的な問題である。教化センターが「班制」を敷いていた時期、つまり、蓮如研究班、平和研究班といったテーマに取り組み体制を構築していた頃には、同和問題研究班もあった。そこでは確かに被差別部落での差別問題を課題にしていたのである。しかし、同和研究班が解散してから十三年を経た今、差別問題を真宗門徒の課題として受け取る意識が薄れてきたと指摘されても反論しようがない状態に陥っている。「平和展」は、差別問題を主たる課題に置いていないが、日本とアジアという関係を視座とするならば、差別の問題は避けることはできない課題である。そして、親鸞聖人の教えと

社会との接点の最前線に立つ教化センターに関わる全ての者が、繰り返し差別問題を学び自らの課題とすることが必要である。そう確信するがゆえに、この度の研修会を開催する運びになったのである。

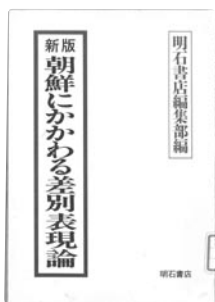
今後の方向

当センターにおいては、今後このような問題を再び起こさないことを願い、主体的に差別問題に取り組んでいかなければならない。なぜなら、親鸞聖人を宗祖と仰ぐ者にとって宗祖の開かれた本願念仏の教えこそが真に人間を解放に導くものであるからである。この問題に取り組むということは、「差別」という課題を如來よりいただき、同時に宗祖の教えに身を引き当てて学び続けることである。差別問題に取り組み意識を深めることで、人を傷つけずには生きていけぬ自らに内在している「差別容認」の姿を見つめ、差別や偏見を超えた同朋社会の実現に向けた人間解放を目指していくことを人間本来の願いとして受け止めることが必要である。その取り組みの第一歩として、差別語に自身を学ぶ研修を行ったのである。差別を否定する考えを持ちながらも「傍観者」たる私の姿勢は、まことに恐慚慙愧することである。今後、教化センターでは、差別問題の本質についての考察を深める取り組みを継続し、同朋社会の実現の一助となるべく歩みを進めることとする。

(主幹 荒山 淳)

^{※1} 民族差別と闘う連絡協議会編「シンポジウム 民族差別と表現——植民地支配の清算は終わっていない——」一九九四年 六頁より抜粋。なお、括弧内は、内海愛子氏の論文「朝鮮人」ということば」朝鮮研究 一三五号 四一—八頁(一九七四年)より引用されている。

^{※2} この点について、明石書店編集部編「新版朝鮮にかかわる差別表現論」(明石書店、一九九二年)に諸説掲載されている。



センターにて貸出中

福島のことを憶い何かをしたい!! —研究生有志が「御坊夏まつり」に 浪江太っちょ焼きそばを出展—

昨年に引き続き教化センター研究生が有志を募り、御坊夏まつりの東日本支援物産コーナーに福島県の「浪江太っちょ焼きそば」を出店した。

昨年は、研究生の先輩方が主となって福島県に向かい、震災後、浪江町から移転を余儀なくされ、二本松市で浪江焼きそばを販売している「杉野屋」と、工場が被害を受けて群山市に移転した浪江焼きそばの製麺所の「旭屋」を訪問した。そして、そこで聞いてきた現地の方の想いや作り方を私たちにも伝えてもらい、夏まつりに出店した。

今年は私自身が福島に行き、杉野屋さんと旭屋さんを訪問させていただいた。旭屋さんでは、11月に豊川で行われるB-1グランプリに参加するというお話などを聞くことができ、行動の幅が広がっていることを知ることができた。また、昨年の夏まつりにおいて、浪江焼きそばが大盛況であったことを話すと、とても喜んでくれた。終始笑顔でお話をされていたことが印象的だった。

夏まつり当日「浪江太っちょ焼きそば」は、昨年に続き大盛況となり、

終了時間前に完売した。お客さんからは「福島の焼きそばですね」「去年も食べました。とても美味しかったです」「はじめて食べたけど、美味しかった。また食べたい」などの言葉を聞くことができた。福島の焼きそばだと知っている人も、知らない人も、浪江焼きそばを食べて福島のことを憶っていたいたけたのではないかなと思った。

「福島のことを憶い何かしたい」という念^{おも}いで研究生が一つになり何かをする。それは大変なことだったが、とても楽しいものだった。一つのことと一緒に取り組んでいくということをもっとやっていきたい。

(第8期研究生 石原 唯和)



絶えず長蛇の列で今年も完売!! 売り上げを義捐金として製麺所「旭屋」などに送金しました。

INFORMATION

教化センター日報

■2013年6月
～2013年8月

6月4日 研究生・現地研修
～5日 「五箇山地方・一泊研修会」
6日 H P リニューアル会議
7日 研究業務「平和展」学習会
11日 研究業務「いのちに向き合う宗教者の会」後援
14日 研究生・実習「真宗門徒講座

(真宗門徒のくらしとつとめ③)」
20日 H P リニューアル会議
21日 研究生・学習会「真宗の未来」
26日 教化センター運営会議
28日 東別院でづくり朝市 出店
7月3日 H P リニューアル会議
5日 研究生・学習会「尾張講習会」聴講
10日 研究生・学習会「真宗の未来②」
12日 研究業務「平和展」学習会
16日 H P リニューアル会議
19日 研究生・実習「真宗門徒講座
(真宗門徒のくらしとつとめ④)」

22日 研究業務「平和展」学習会
24日 H P リニューアル会議
26日 研究生「第7期生 修了式」
29日 研究業務「平和展」学習会
30日 H P リニューアル会議
8月2日 教化センター職員研修
「差別と私ー差別語に学ぶー」
9日 研究生・学習会「課題研修」
11～14日 「あいち平和のための戦争展」参加
24～25日 御坊夏まつり 出店(研究生有志)
28日 東別院でづくり朝市 出店
29日 研究生・第10期生 面接

第10期研究生あいさつ

私は学校を卒業して、周りの方から「若いから期待しているよ」と言って頂くことがありますが、何一つ応えることが出来ていません。この機会に精一杯勉強して、少しでも期待に応えることが出来る人間になりたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

菱川 俊(第5組 以覺寺)



様々な出来事や人々と出会い、ともに学んでいく三年間を過ごそうと思っております。真宗の伝統を学び、今、目の前にある現実から目を背けずに向かい合っていくことで、仲間とともに成長していきたいです。本気で取り組むということを課題として活動します。よろしくお願いします。

玉腰 暁広(第1組 照見寺)

《編集者雑感》

私たちは「門徒さんに親鸞聖人の教えをどう伝えるか」「真宗を社会にアピールしなければならぬ」という議論をすることがある。その中で色々な意見が交わされるが、とすると聖人の教えを理解している人が教えを理解していないご門徒さんや一般の人」に教えてあげるという構図で進んでいくこともあり、違和感を憶えるのである。

ある時、僧侶対象の研修会で出席者から「門徒さんに親鸞聖人の教えをどのように伝えていいかわからない」という問いが投げかけられた。講師は、「自分が悩み苦しんだ言葉でないと伝わらない」とおっしゃり私のことを指摘されていたと思った。

なる程、上から目線で自分不在の話は伝わらなくて当然だ。そこでまた問いがわきあがる。ではどうやって「悩み苦しめばいいのか」と、またHowToを求める自分がいるのである。(S)

お知らせ

教化センターの人事がありましたのでお知らせいたします。

〈異動〉事務職員 中村 亮 (別院教化事業部へ)
〈退職〉業務嘱託 伊藤 教信
〈新任〉研究員 新野 和暢 (担当: 大谷派の近現代史)
業務嘱託 小笠原智秀
業務嘱託 黒田 真慈
業務嘱託 林 博行
教化推進要員 加藤 淨恵
事務職員 佐藤 亮賢 (別院より出向)

■教化センター

〈開館〉

月～金曜日 10:00～21:00

土曜日 10:00～13:00

(日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

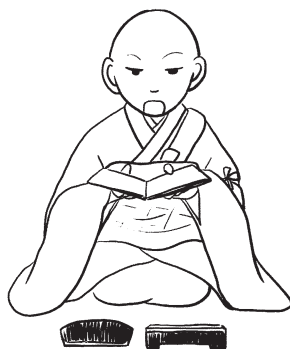
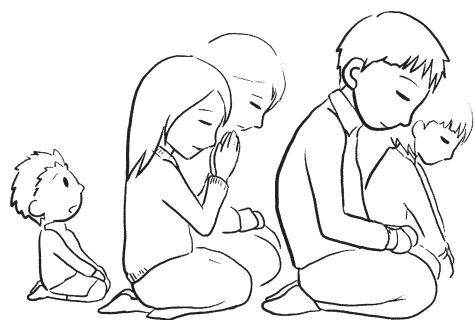
〈貸し出し〉

書籍・2週間、視聴覚・1週間

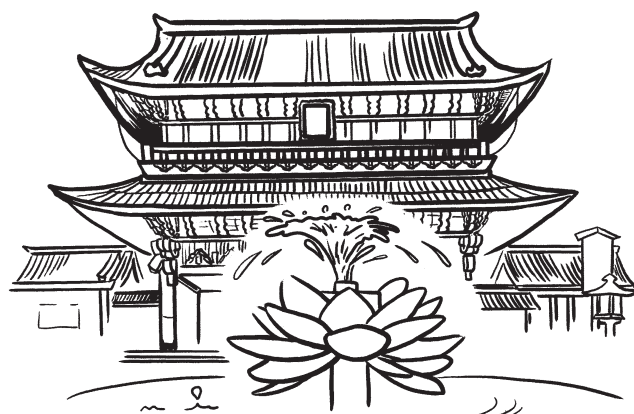
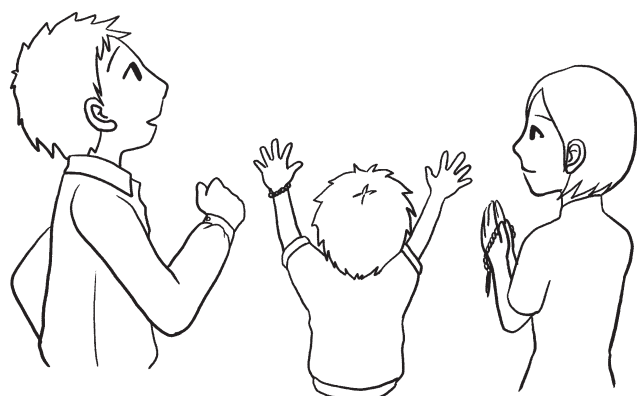
～お気軽にご来館ください～

寺報イラストカット集

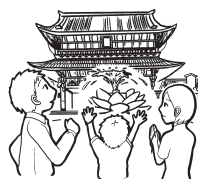
寺報やチラシなどにお使いください。



◆イラストテーマ「御文」

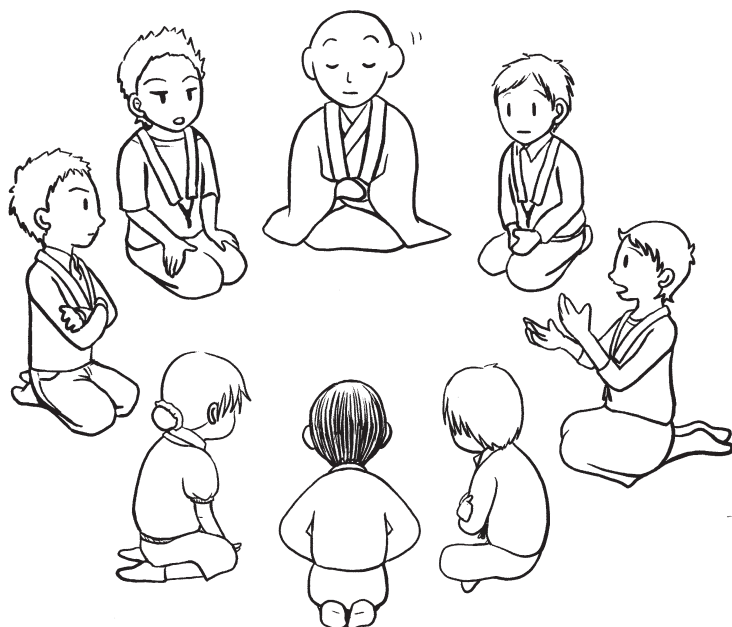


例

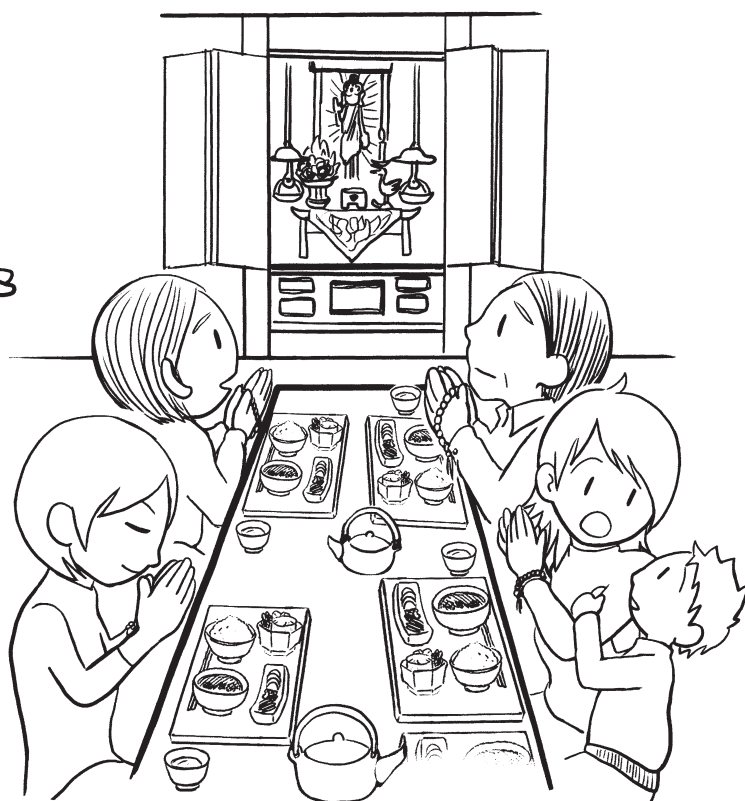


◆イラストテーマ「真宗本廟御影堂門」

※左のイラストと組み合わせて「本山参拝」としても使用できます。



◆イラストテーマ「寄合・談合・座談会」



◆イラストテーマ「お斎」

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。